

## これからの磐城 その1

白川静先生をご存じだろうか。漢字が持つ体系的なつながりを明らかにされた漢字研究の第一人者で文化勲章を受章された大学教授であった人である。私が、大学受験をする当時、立命館大学にその研究室は置かれていて、深夜まで煌々と明かりが漏れてくるその研究の状況を学生たちは畏怖をもって対峙し、学生運動華やかかりしその時代にも、威厳を持って先生と呼ばれないことはなかったという逸話がある方である。そのことは、高橋和巳著「わが解体」に詳しく記されている。(だから私は立命館を受けて合格した。)

その白川静先生のことを、内田樹が「昭和のエートス」という文章の中で述べている。

中国の聖人「孔子」について、白川静先生はこう書く。

孔子の世系についての『史記』などに記す物語は、すべて虚構である。孔子は、おそらく、名もない巫女の子として、早く孤児となり、卑賤のうちに成長したのであろう。そして、そのことが、人間についてはじめて深い凝視を寄せたこの偉大な哲人を生み出したのであろう。**思想は富貴の身分から生まれるものではない。**(白川静『孔子伝』中公文庫 2003年 26頁)

今、大学入学を志して学ぶ磐城高校生の中にも、親のことを思い、家のことを思って、国立大学のみを焦点を当て苦吟する者たちがいる。安易に妥協せず、少ない授業料を基に、生活も自らのアルバイトによって生計を立て、できる限りの努力と固い意志によって、重い扉をこじ開けようとしているのである。

曰く「母一人子一人の家族です。親に面倒はかけられませんから。とにかく東京大学で学びたいのです。最高の知的機関で学び、自らのことではなく、社会のために自分は道を切り開かねばならないのです。」

その言葉を聞いたとき、まさしく、白川静先生が、孔子を語った「思想は富貴の身分から生まれるものではない。」という言葉思い出した。その生徒は今も毎日、6:30分着の列車でいわき駅に降り立ち、6:55分には校門をくぐる。この生徒と毎日あいさつを交わしながら、心の奥底から「頑張るのだ」と呼びかけそうになる。ぐっところえて笑顔であいさつを交わすが、その志の高さにまさしく「磐城高校」の精神を感じている。いわきにも、このよう生徒がまだたくさんいるのだ。

この生徒がどうなるかは、これからの日々の深さと努力の結集が必要である。結果はどうなるかわからないが、私は、この生徒を心から信じようと思っている。

ひとたび、決めた志は、自らの境遇とか、銭の多寡によって変わるものではない。人への思いで決まるのである。だから、私もこのような生徒たちを心から思って思って、思いを尽くそうと思う。3月31日まで頑張ろう。私も君たちと一緒に頑張りたい。頑張らせてほしい。力の限りに応援するぞ。

